息子が二階にいるというのに、下半身をむき出しにして真樹夫を迎え入れる行為を拒もうともしないのだ。言い方をかえれば拒みたくても拒むことができなくなっている女にしたのだ。いずれは息子の前でもノーパンでいるようにさせたい。いやもう今夜からでもいいだろう。さっそくにノーパン調教をしてやろうかとひそかに思っている。美砂江は決してその背徳感にまみれた露出的な調教を拒むことはしないだろう。その自信はあった。せいてはことを仕損じるが、この女は若いペニスの快楽に溺れているのだ。息子の前でも一人の女として男根の前で服従をさせる光景を思うだけで、加虐心がうずいてくる。

「おまんこに入れてやるぜ。こっちに臀を向けろよ」

腰をめぐらせて臀部を突き出させる。スカートをまくり上げた白い尻肉は蕩けるように丸みをおびており、なでると手に吸い付くような滑らかな肌である。双臀の谷間の亀裂は深く、突き出した格好の臀部は、若い怒張をいざなうかのように媚肉の蜜を含んだ果実をのぞかせている。恥毛は

薄く、指で押せば果汁がじわっと染み出てくるような美砂江の女性器を可憐な様相で飾っており、その上部にはすみれ色の清楚なアヌスがのぞいている。美砂江はその排泄器官に触れられることをはげしく羞恥する。菊の花と表現するにふさわしいきれいな襞が放射線状に広がったアヌスだ。

「そこはいや･･･触らないで」

と懇願する羞恥の皮を一枚ずつはがしていき、指で何度も触れてやる。菊花の文様の襞をこすりあげるように執拗に排泄器官を愛撫する。アナル性交が可能になるように調教するのだ。そう思うと怒張はさらに膨れ上がる。

　亀頭を薄い恥毛に飾られた女肉にあてがい、そのままでじらしてやる。膣口で固く膨れた亀頭を揺すって遊ばせる。クリトリスを亀頭で突き、また膣口に戻る。

「ほしい」

堪えきれなくなった美砂江が挿入を懇願する。

「何がさ？」

「あなたのもの」

「はっきりと言いなよ。何を入れてほしいのさ」

「いじわる･･･あなたのペニスよ。そのたくましいペニスを入れてよ」

「美砂江のどこに入れてほしいのさ」

亀頭をさらに膣口にもぐりこませ、次にはまた浅く抜いてやると、美砂江の双臀が前に突き出される。挿入をねだる仕草だ。

「おまんこにあなたのたくましいペニスを入れてください」

はっきりと淫語を口にできるようになった美砂江。ぐいっと突く。すでに愛液がにじむ膣口は亀頭をゆっくりと呑み込む。押し進めると、美砂江は上半身をのけぞらして身悶えた。一気に突き上げた。男根が根元まですっかり挿入される。密着する下腹部。ペニスはもう姿を隠し、美砂江の膣にはまっている。

「ううっ」

美砂江がうめき声をあげる。さらに男根を打ち込むと、白

い尻肉を弾ませて両手をソファに付いている美砂江は、

「ひぃっ！」

と甲高く悲鳴をあげた。

「そんなに大きな声を出したら拓斗君に聞かれるぜ。ふふふ、息子が二階にいるというのにすっかり感じちゃってさあ。いやらしいぜ。もう母親ではなく、一人の女だよな」

ずんずんと腰を前後に律動させ、固い灼熱の分身を打ち込むと、やがて射精の快感が訪れる。

　美砂江はピルを服用している。中出しを望む真樹夫に応えるように避妊をし、常に精液を子宮に浴びる用意をしているのだ。背中をそらし、熱い樹液を浴びながら、一緒に絶頂を迎えた美砂江にキスをする。挿入したままキスをし、

「家庭教師が終わったら、またかわいがってやるかな、少しの間は辛抱だぜ。それから、今夜は下着を穿かないでいろよ。すぐに挿入できるようにスカートの中はノーパンだぜ。いいな。それができないようなら奴隷失格だ」

「そんな言い方いやだわ。奴隷失格だなんて言わないで。

悲しくなるわ」

「だったら俺の命令に従いな」

「これはあなたの命令なの」

「ああ、ご主人様の命令さ。美砂江は俺の命令に従うことができるよな。俺を愛しているんだからな。」

「わたし、従わなければいけないの？あなたの奴隷だから？あなたを愛しているから？」

「ああ、そうさ。」

「あなたは私を愛してくれている？」

「こんなに愛しているのにその質問は無用さ」

真樹夫は力強く抱きしめた。

「俺だけの愛する奴隷だ」

「わたし、あなたの魅力に絡めとられてしまった奴隷だわ。でも下着をはかないで拓斗さんの部屋に入るなんて恥ずかしいことよ。わたしをそんなにいじめないで」

「俺と美砂江だけの秘密の共有。それは二人の距離感をさらに縮める愛の仕掛けだと思わないかい。二人だけが知っ

ている秘密が多くなればなるほどに、男と女の関係は深まっていく。それに、ぼくの要求に応えてくれる美砂江に愛の深さを感じたい。奴隷として尽くす美砂江を見ると、こんなすばらしい女性を独り占めしているんだってすごく幸福な気分になる。ご主人様の幸せだよ。だからこれからも命令は絶対だ。」
射精したばかりのペニスを引き抜く。性交前に脱がした美砂江の下着を手にとって上着のポケットに入れた。

　美砂江はスカートの下に下着を着用しないまま、二階の息子の部屋に冷たい飲み物を持ってあがる。階段を上がる下半身が心もとない。ノーパンで拓斗の部屋に入るなどどうかしていると思う。母親として失格だと思う。真樹夫は逢うたびに美砂江に対してアブノーマルな要求をしてくる。お尻を叩きたいと言い、スパンキングされた。自宅での性交を好むようになっている。息子が在宅中にも性交を

迫られる。そして美砂江はそれらの要求を拒むことができなくなっている。今夜は、下着を穿かないで息子の部屋に上がることを要求された。拒めなかった。拒んで真樹夫との関係にひびを入れたくはなかった。

　真樹夫の存在は日に日に大きくなり、愛しているとはっきりと自覚するようになっている。年下の若い真樹夫の気持ちを繋ぎとめておきたいと心から願うのだ。真樹夫が奴隷と言うなら、奴隷として扱われてもかまわないと思う。たくましい男根で貫かれ、はげしく抽送される性交に溺れてしまっていることを認めないではおれない。真樹夫の指で愛撫されただけで、美砂江の女はしっとりと潤んでいるのだ。真樹夫の声を聞いただけで、子宮は熱く疼き、はげしい性交を思ってしまう。

　一週間ほど前に真樹夫に聞かれたことがある。性交の最中だった。

「俺とのセックスと息子との生活と、どっちが大事だい？。なあ、答えてみろよ」

そう聞かれ、

「選べるはずがないじゃない･･･そんなこと聞かないでよ」

と固いもので貫かれながら答えた。でも、心のどこかで、

「あなたとのセックスが今の私には大切なの」

と叫んでいる自分がいる。ふしだらな母親となじられても、一度若い男性のたくましいもので貫かれはげしい絶頂感を味わわされたら、もう後戻りできないのだ。女の脆さを呪うしかないのだ。

（あなたのたくましいペニスの虜よ･･･だからあなたに嫌われたくない･･･あなたの望むことだから下着を穿かないで息子の前に立つわ。わたし･･･あなたの大切な奴隷だから･･･）